

「こどもまんなか」を問う 41

先日猛暑の中、通信高校の次年度資料を氷見市の四つの中学校に届けた。どの中学校も教頭先生が丁寧に対応をしてくださった。

その後雨晴を経由して高岡伏木の古本屋なるやに立ち寄った。伏木は去年の能登沖地震の復興工事の真っ只中だ。液状化による被害が酷いと報道されているのは知っているが、大変な工事になっているようだ。

なるやは初めてだった、独特な入り口から入った。店主さんはお客様に対応していた。本棚を眺めていたが、なかなか欲しい本を見つけれなかったのも、お客様に対応していた店主さんに声をかけた。谷川俊太郎さんの詩集はありますかと尋ねたところ、昨年亡くなられた後人気で在庫はなくなったとのことだった。

店内を眺めていると、目立っていたのはひとのまの宮田さんの著書が並んでいたことだ。古本屋に新刊があるのは違和感があったが、なるやだからこそ納得だった。そういう私も先日宮田さん本人から直接購入した。その時同席していた真生会富山病院の明橋先生が宮田さんにサインを頼まれたところ宮田さんはさっさと慣れた手つきでサインをしていた。さすが売れっ子の宮田さんはサインできるのだと驚いてしまった。

なるやでは谷川さんの詩集がなかったのも、店主さんおすすめの詩集をご紹介いただき、山之口獏詩集を購入した。とても感じのいい店主で突然訪ねておすすめ本をお聞きしても丁寧に対応いただきました。たぶん今後たびたび訪ねていくことになるそうだ。

「こどもまんなか」を問う 42

自分の手を見ることがよくある。特に親指と人差し指の間にある部分が気になる。そこはおそらく水かきのような構造だったと言われ、鳥類、爬虫類、両生類と共通の祖先を持っていたことを表している。

自分のからだに太古の祖先の痕跡を見ることができるといことは、全ての生き物とつながっているとも言える。私たちは自分の意志で誕生してきていない。生まれる前には自分はいなかったのも生まれたくて生まれたのではないのは確かだ。誕生には自分の意志がないとすると、どうして生まれてきたのかという疑問が残る。

それには宇宙が誕生の元になっているとしか考えられない。

若くして亡くなった哲学者池田晶子さんは「14歳の君へ」で次のように書かれている。

人間の体は自然と同じだ、自然は人間の意志を超えている力だ、心臓は自分の意志で動いているわけではない、呼吸もそうだ、生きているところの体の働きは自分の意志でどうこうできない、意志を完全に超えているもの、つまり自然の力が働いているからだ。

高岡伏木の古本屋なるやで買った詩集、詩人山之口獏さんは「喪のある景色」で次のように謳っている

うしろを振りむくと

親である

親のうしろがその親である

その親のそのまたうしろがまたその親の親であるというように

親の親の親ばかりが

むかしの奥へとつづいている

まえを見ると

まえは子である

子のまえはその子である

その子のそのまたまえはそのまた子の子であるというように

子の子の子の子のばかりが

空の彼方へ消えいるように
未来の涯へとつづいている
こんな景色のなかに
神のバトンが落ちている
血に染まった地球が落ちている

人間が生まれてくることには不思議なことがいっぱいあることには間違いない。

「こどもまんなか」を問う 43

二極化する不登校

学校に行けないこどもたち、要するに不登校のこどもたちと日々接していて感じていることは、以前とは違った様子であることだ。

まず、一つの群れは、今までと同じように、学校に行けない背景に学校や家庭で傷つき、追い込まれ、自分を責めてどうにもならない状況のこどもたちだ。その子たちは二次障害として摂食障害等の症状を持っている。この場合は家庭は学校への不信感を持っている場合が多い。

もう一つの群れは、学校に行くことがつらくなって早い時期に休むようになっていくケースだ。彼らはそれほど追い込まれてはいないので、ライトな不登校と言ってもいい。

その背景には 2016 年に制定された教育機会確保法の影響があり、その法によると学校に行くのがつらいと休養してもいいと謳われているので、学校側も早い時からそのように対応しているようだ。彼らは心を深く傷ついてはいない、2019 年に「明るい不登校」という書籍が出版されたが、文字通りそのような雰囲気の子どもたちである。

その本が発行された当時は「明るい不登校」状況ではなかったが、法が浸透していくと大きく変わっていくのではないかということを考えて命名したと出版社が言っていたのを思い出す。

「明るい不登校」の次のステージは、不登校という考え方も消えていき、学校外に多様な教育機会を求めることが普通になっている状態だと思う。

その時にはこどもを取り巻く教育環境も大きく変わり、学校にも多種多様な形態があって、フリースクールと共存しており、教育機会に多様な選択肢があり、こどもたちが枠にはまらず自由に過ごしていける環境が保障されるようになっていくと考える。

「こどもまんなか」を問う 44

教育とは、なにか上から教えていくものではなく、こどもたちが気づいていくことの積み重ねではないかと思う。今のうちに、教えなくていい、教えられるのはもうたくさんだ。

その材料の一つが教科書であり、教員は本当はいらない。こどもたちの中で話し合っただけで、その時その時、その場その場でリーダーを決めればいいのか。

こどもたちの安全を見守る大人はいるので、それが教員だったらそれで良い。

もう自然のままでいいのではないかと思う。ありのままで、その子のやりたいこと、したいことを自由に、まるでサファリパークのように、地球のあるがままの自然の中で、宇宙の動きに身を委ねることが一番だと思う。

宇宙で起こる不思議な現象、それはビッグバンから瞬間瞬間に起こってきたのであるが、私たちはそれから比べるとちっぽけな情報で支配され、感じなくなり、見えなくなり、当たり前のように考えて日々を過ごすようになっていく。

てしまっている。

宇宙の次元から考えると私たちがやってきたことには何一つ信頼できるものはない。全て有限だから。本当は正解なんかない、正解を求めようとする教育はいらない。宇宙のことを知ったかぶりしていくのはやめよう。

だから学校はいらない、教室はいらない、黒板はいらない、机はいらない。もう一度教員はいらない。

こどもたちはたぶん自分たちの城を作るだろうから、それでいい。

できたら青空のもとでいいと思う、サファリパークだから。

「こどもまんなか」を問う 45

不登校政策の大転換

不登校が増加の一途を辿っている。昨年の調査では全国で 34 万人を超えている。

この現状の中で、文部科学省も COCOLO プランで魅力ある学校作りを推進していこうとしている。

しかし、不登校のこどもが増える減らすということを議論する時代は終わり、不登校になっていくこどもたちと共存していくという時代にもうなっている。

現行教育制度のもとでは、不登校は増え続けていくだろう。要するに今の学校、教員のもとでは全てのこどもたちを受け入れることは到底不可能ということである。

現代のこどもに対する捉え方、並びに対応の仕方が旧態で全く追いついていなく、また変えていくにしても、同じ箱の中での変化では取り残されていくだけである。こういう状況で不登校を減していくことは無理で、増加のベクトルの向きを変えることはできない。

もう学校に行かなくなっているこどもたちを学校に戻すことを考えることをやめて、学校に通うこどもと学校に行かないこどもたちの共存を進めていくことが今求められている。

これは日本の教育の大転換への過渡期であり、旧態依然たる日本教育制度への挑戦を不登校のこどもたちが先頭をきって進んでいる。

共存する体制とは、現行の学校と学校に行かないこどもたちが求める場所になる。後者の場所とは、多様な学びが展開されているところと言える。その場所を今はフリースクールと呼んでいたりするが、今後はそれに限らない場所が生み出されてくるだろう。

国が 2016 年に教育機会確保法制定で不登校の存在を認めたのであるが、それは序章であり、次のステップは学校教育の中で一条校に限るから脱して、多様な学びを保障することである。要するにこどもたちの教育をオープンにしていくことである。一方 15 歳までは今まで通り国が関わり無償で対応することは必要であるとする。

「こどもまんなか」を問う 46

射水市の教育行政に関する意見交換及び要望

令和 7 年 7 月 14 日(月)

射水市夏野元志市長 殿

特定非営利活動法人はあとぴあ 21

理事長 高和正純

記

①教育と福祉・医療との連携について

こども家庭庁令和 6 年 4 月 25 日通知に対する射水市としての考え方をお聞きして意見交換

「教育と福祉・医療との連携を推進する体制を整備する」を要望

②「不登校」に関する対応

増加する不登校にどのように対応していくのかをお聞きして意見交換

射水市教育振興基本計画にある不登校施策について

射水市こどもの権利条例について

「民間機関との連携を推進する」を求め、

教育委員会と民間機関との協議会設置を要望

教育支援センター(旧適応指導教室)民営化

③通信高等学校の位置付け

市内にある通信高等学校に対する考え方をお聞きして意見交換

「市教育体制の中に通信高等学校を位置付ける」を求める

射水市と高等学校との連絡会に通信高等学校を加えるを要望

④「ひきこもり」に関する対応

厚生労働省は「ひきこもり地域支援センター」を各市町に設置

射水市ひきこもり地域支援センターを開設を要望

「こどもまんなか」を問う 47

先日、中学校訪問を行っていた。目的の学校数校を終えて帰路についていた。ところがその近くに学校があるのを急に思い出し、方向転換して向かった。

その学校の存在は知っていたが、初めての訪問になる。少し木立の中に入って行くと、大きな近代的な病院が建っていた。この病院の近所にあると思っていたが、学校らしき建物が見つからなかった。

駐車場に停まっていた方にお聞きすると、親切に教えていただいた。もう少し上っていくとありますよとのことだった。木立に隠れていて見えなかったのだ。その奥に学校らしき建物が見えてきた。駐車場に車を停めて、グラウンドを挟んで向こうに白い校舎があった、がグラウンドには誰もいなくてひっそりとしていた。

しかし門柱には学校名が書かれてあった。

インターフォンを鳴らすと返答があり、玄関扉が開錠する音がした。玄関に入って事務室の方に用件をお伝えした。

すると一人の方が声をかけて来られた。すぐにはどなたかわからなかったが、名乗られ、以前高岡の高等学校でお会いして以来ですね、と懐かしそうにおっしゃられて、十数年前にお会いしたことがあるのを思い出した。そんな前のことを覚えておいてくださって、声をかけていただき嬉しかった。お元気そうでなによりだった。今回の訪問は用件よりはこの方との再会が主のように思えた。

その後コーディネーターの先生が現れて用件を済ませようとする、しかし今度は先生が私に伺いたいことがあったようで、この学校から私の学校に来た生徒のことを気になっていてその様子を聞きたかったと言われた。彼は元気ですとお伝えするととても安心してくださった。この方も私が来るのを待っていたと思えるほどだった。突然の、それも咄嗟に思い出して方向転換しての訪問で、お互いに予期せぬことであるが、そういう時に限って不思議な出会いが待っているという体験をした一日となった。

「こどもまんなか」を問う 48

今日は朝より石川県のある町議会に呼ばれひきこもり支援について話すことになっていた。

氷見から論田・熊無を越えて羽咋方面に向かった。まだ昨年の能登震災の影響が残っていて、その被害の大きさを感じながら車を進めた。この道は国道 415 号線だと気づき新湊からつながっていることを改めて知った。

富山を出た時は晴れていたが、山越えする峠あたりでは小雨が降っていた。

途中、資料をコピーするためにコンビニを探したが、山の中なのであるわけではない。山を越えてひらけてきたあたりにコンビニがありコピーすることができた。羽咋に入ってくると晴れてきた。

今日は「ひきこもり基本法の制定」と掲げた幟旗を作って初めての講演になるので、少し高揚した気分で見地の議会に到着した。まずは幟旗を持った姿を庁舎の前で写真撮影した。幟旗を持って庁舎内に入っていくと職員の方が少し驚いた様子で「ちょっと」と言いかけたので、「いやあ、こんなの作ってきちゃった」と言ってその場をしのいだ。

今日の勉強会は地元の公明党の議員さんが議長をしておられ、みなさんに呼びかけていただいて開かれることになった。そのきっかけは昨年の金沢での全国大会を開催する準備の中で出会った公明党の女性議員さんだった。その議員さんは地元の家族会のメンバーとの関係で、意見書採択をお願いにあがった。趣旨に賛成いただき、採択を主導してくれた。また全国大会に市長さんを誘っていただき、出席して下さった。その公明党つながりのご縁から始まった今日の会だった。

会議室に入ると古参の議員さんがおられて早速名刺交換、その後次から次へと入って来られて名刺交換が忙しくなった。

まずは職員さんに講演中の写真撮影をだいたいの位置を定めてお願いした。

最後に委員長さんが入って来られて挨拶し、

少し早めに起立して開会となった。

私の持ち時間は 30 分でその後質疑応答 20 分くらいで終了という予定で始まった。ひきこもりについて、現状について、事例を紹介、最後にどうしてひきこもり基本法制定が必要か、30 分いっきにしゃべった。短い時間の中で話す内容はたくさんあるのでどうしても早口になり、いつも息をつくこともなく話し続けることになってしまった。

質疑応答ではまず男性議員さんから、障害者就労事業所に関係されているようで、ひきこもりの方の就労について聞かれた。この方はひきこもりの歴史などについても聞かれ、何度も手を挙げられていた。

次に隣の男性議員さんから彼らにどのように接していいのだろうか、ということ聞かれた。

次に私の右隣におられた女性議員さんが近くにいろんな事情でひきこもっている若者がいることを話された。最初から涙を流してむせびながら、泣き声で話されていた。よほど近しい関係の方にまつわることだったのかもしれない。

最後に委員長さんも、たぶん自営業をされていてひきこもり経験者を雇用しているようだった。彼らの雇用における課題について聞かれた。

質疑応答もいろいろな質問が多く出されて、結局時間をオーバーしてしまっていて終了した。

終了後また何人かの議員さんが話しかけて来られて、幟旗をバックに写真を撮ってくださった方もいらっしゃった。

その後、3 月議会で意見書採択していただいたお隣の七尾市議会事務局へ意見書をいただきに伺った。コピー代金 10 円を支払って受け取った。七尾も公明党の議員さんが主導して採択された。

中能登町議会でのお話しを終えて、お礼のメールを何人かの参加された議員さんに送った。意見書採択に異議はないとの返事だった。

石川県は 19 市町村の中で 11 市町村で意見書採択がされている。残りは 8 市町村である。今日の中能登町以外でまたツテを辿って議員渉外を行い、富山県に次ぐ全県制覇を実現していきたい。

その時には石川県馳知事さんにご報告に馳せ参じできればと思っている。

「こどもまんなか」を問う 49

「生きている」

いくつかの振動がからだ全体にひびく
静けさのなかにひびいている
暗闇とうらおもてとなり振動している
ひびきはともを亡くしたときから
もう何人も逝った
海に打ちよせる波
おおきなうねり
心臓が脈打つ、ともに生きている
細胞が分裂する、ともに生きている
宇宙が膨張する、ともに生きている

ひびきは規則正しく共鳴している
漆黒のなかに稲妻のごとく
生まれる前ビッグバンのときから
数えきれないいのちがめばえた
いまでも星雲が生まれ続ける
どこかに生きている
過去、未来永劫ともにいる
誕生のとき、ともに生きている
ものごころついたころ、ともに生きている
年老いた今、ともに生きている

「出会い」

それはまだ薄暗い早朝
よく眠れなかった
外に出て行く
なにか起こるという
突然やってきた
強力なエネルギー
引き寄せられて行く
運命が変わる瞬間
身を委ねるしかない

ひかり輝く巨大なかたまり
全てをつつみこむ
平安に満たされる
時が止まっている
いのちが吹きこまれる
ひとりでない

新しい始まりだ
とんでもない出会い
ともに歩みだす

「こどもまんなか」を問う 50

「アゲハチョウ」

暑い真昼アゲハチョウに出会う
いつのまにか近くに来ていた
目の前を優雅に飛んでいく
こちらを意識しているかのように
二つの羽根がひらひらとはばたく
黒といろいろな色が混じっている
どこかに飛んでいった

窓越しにアゲハチョウを見かける
庭に咲いている花々にやってくる
どこからやってくるのか
誰かを探しているかのように
出会ったとき思い出す
彼女も楽しみにしていた
あれから毎年やってくる

「孤独な葛藤」

邪念がまとわりついてくる
はがそうとするが
はがしてもはがしても
まとわりついてくる
声をあげられない
助けを求められない
恐怖に震える
逃げ出したい
孤独な中でのたたかい

邪念がまとわりついてくる
なんとかしてほしい
私の人生を取り戻したい
こんなのではなかったはずだ
この葛藤を断ち切らないと
すべてを奪われてしまう
自分の決意が試されている
どんなことがあっても逃げない

孤独な中でのたたかい

邪念がまとわりついてくる
なんて悪いことをしたんだ
お前が悪いんだと責めてくる
認めてしまいかねない
けれど私は屈しない
否定し続けるしかない
絶対に受け入れない
真実を盾に立ち向かう
孤独な中でのたたかい

「息苦しい日々」
生きていくのがつらい
自分ではどうにもできない
人間はみんなこんなのか
自分だけなのか
生きるとはなんなのか
つらくても生きていかないといけないのか
呼吸するのも苦しい
胸が締めつけられる
どうしてこんな日々を送ることになったのか
生きていることに意味はあるのか
苦しみながらその意味を見いだせというのか
生きていくことはつらくて苦しいことなのか
どこに希望があるというのか
教えてもらうことではないことはわかっている
しかし生きていくことに希望が持てない

生きていくことをとことん考えている
なぜ生きるのか、なぜ生きるのかと
漠然と生きているのではない
いのちを削って考えている
さまざまな葛藤を抱えながら考えている
24 時間考えている、考えない瞬間はない
緊張感を持ち続けて生きている
逃げない日々だ
まだ解答は見出せていない
果たして明確な生きる意味を持って生きている人はいるのだろうかとも思うことがある
ある意味永遠の課題なのかもしれない
しかしわたしにとっての生きる意味を見つけない
そうしないとこの息苦しさを乗り越えられない

生きる意味を追求するのは人間だけだ
そこに人間としての存在価値があるに違いない